

(公表用)

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」(平成26年度採択)

事後評価結果

番号	研究名	研究代表者	評価
26-1	次世代モビリティ社会を踏まえた移動空間評価手法の開発研究	名古屋大学 教授 山本 俊行	B
<p>&lt;研究の概要&gt; ※成果報告レポートより引用</p> <p>ストレスフリーな道路移動空間と交通事故ゼロの社会を実現するため、運転ストレスの計測手法と評価手法の開発を目的として、一般市民モニターによる実道での運転ストレスの計測実験を行い、このデータを用いて、運転ストレスの構造的な要因解明とストレス値の高い道路区間の判別手法の研究開発を行った。</p> <p>&lt;事後評価結果&gt;</p> <p>道路の質的評価方法の確立には至っておらず、実務応用への展開・見通しは必ずしも明確ではないものの、生体情報の計測結果に基づくストレスの評価手法の適用可能性を示し、一定の学術的成果は認められるため、研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価する。</p> <p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. ドライバーの生体情報から道路空間を評価して、交通事故の予防対策を行えるようにしたことは評価に値する。</li><li>2. 一般の実験モニターについて年齢以外の運転能力に関する個人属性が不明であるため、評価結果の不偏性に疑問が残る。今後、実験モニターの健康状態と運転ストレスとの関係を把握し、運転ストレスを低減させるような環境づくりも検討できるようになることを期待する。</li><li>3. 生体情報を組み込んだストレス指標の提案には成功しているが、研究目的に掲げた「実務者に理解しやすい評価軸の開発」には至っていないのではないか。成果報告レポートの中でも、マニュアルやガイドラインへの言及が必ずしも十分とは言えない。</li><li>4. 「道路空間の質的側面の評価手法」として、ここで提案している手法がどのように活用できるのか、データ取得の一般性を含めて明らかにすることが望まれる。</li><li>5. 現実の政策にする場合、データ入手が最大の課題であり、研究から実務へのブリッジに課題が残る。最新のセンサ、情報通信機器の活用等により、効率的に生体情報を取得する実用的手法の開発が期待される。</li></ol>			

※本事後評価は、新道路技術会議の各委員が評価を行い、第32回新道路技術会議において審議したものである。